

薬物乱用

今回は、麻薬、覚せい剤など、薬物乱用のお話です。

実は、私は、厚生省の役人時代、一時期「麻薬課長」を務めていました。その関係もあって、私の政策課題の一つは「薬物乱用の撲滅」です。

日本では、麻薬取締に関係している官署としては、警察、税関、海上保安庁、そして厚生労働省の地方厚生局麻薬部などがありますが、私の担当していたのは厚生労働省の麻薬課、その所属機関である麻薬取締官事務所でした。麻薬取締官事務所は、現在は地方厚生局麻薬部となっています。

日本で麻薬、覚せい剤が本格的に問題となり始めたのは終戦直後からです。太平洋戦争中、モルヒネなど鎮痛剤である麻薬は不可欠の軍需物資でした。また、覚せい剤は興奮作用があり、特攻隊員の戦意高揚のために使われたなどという話もあります。そうした軍の物資が戦後、民間に流出し密売されたのです。

また、関東軍が資金調達を目的として麻薬を上海などの密売市場に流していたという話がドキュメンタリー作家、佐野慎一の「あへん王」という本で紹介されています。そうした非合法品も秘かに国内に持ち込まれたかもしれません。

いずれにしても、昭和20年代から30年代にかけて、わが国ではヘロインなどの麻薬、覚せい剤ヒロポンが蔓延し、横浜黄金町などでは、麻薬や覚せい剤中毒者が路上に溢れることもあったということです。

この乱用期を第1次薬物乱用期とし、続いて昭和50年代は覚せい剤を中心とする第2次薬物乱用期、そして現在は、覚せい剤に加え、新しい合成麻薬や現在の麻薬及び向精神薬取締法や覚せい剤取締法では規制できない幻覚作用や興奮作用をもった新しい化学物質、植物（キノコ類）等がインターネットなど通じて、若者の間に広まっており、第3次薬物乱用期にあるといわれています。このため、今年の通常国会では、薬事法が改正され、そうした新たな乱用薬物、違法ドラッグを規制することとされました。

よくテレビの時代劇などで、あへんを秘かに密輸入する悪徳商人などが出てきますが、日本には、戦前はアヘンを吸引するような習慣はほとんどなかったようです。お隣の中国では、イギリスが持ち込んだ中東産のアヘンによって、アヘン吸引の悪習が蔓延、1840年、日本では幕末に当る頃、とうとうイギリスとの間でアヘン戦争が勃発しました。

ところで江戸後期の平戸藩主松浦静山公が書かれた「甲子夜話」という本にこんな話が出てくるそうです。

「あるお寺で、和尚を始め一同が狂ったように騒いでいる。事情を調べたところ、裏やぶに生えていた野生の麻の芽を取って、味噌汁の具にして食べたところみんな酔っ払った状態になった。麻の初生の芽を食すれば発狂する。」

これ大麻のことでしょうか。大麻は、現在は麻薬として厳しい規制がされていますが、こんな話、聞いたことありますか？